

PROGRAM

♥：山下裕賀 ★：小堀勇介 ♠：池内 響

G.ロッシーニ 歌劇《セビーリヤの理髪師》より

私は街の何でも屋…………… ♠
私の名前を知りたいのなら…………… ★
金貨を見れば知恵が湧く…………… ★♠
今の歌声は…………… ♥
それじゃ、私なのね!…………… ♥♠
思いがけないこの衝撃に…………… ♥★♠
もう逆らうのをやめよ…………… ★

G.ロッシーニ 歌劇《ラ・チェネレントラ》より

むかしむかしある王様が…………… ♥
何か分からぬ甘美なものが…………… ♥★
静かに!声をひそめて!…………… ★♠
あの美しい面影は…………… ♥★♠
必ず彼女を見つけ出すと誓う…………… ★
むかしむかしある王様が…………… ♥
テンポラーレ ～嵐～ (ピアノ独奏)
哀しみの涙から生まれて…………… ♥★♠

PROGRAM NOTES

第1部 歌劇《セビーリヤの理髪師》より

フランスの文人ボーマルシェの戯曲『セビーリヤの理髪師 Le Barbier de Séville』(初演:1775、パリ)は、18世紀後半の欧州における市民層のパワーを象徴する物語。アルマヴィーヴァ伯爵と令嬢ロジーナ(仏名:ロジース)の恋を理髪師が援けるというドラマだが、抜群の知恵と行動力を有する理髪師フィガロの人物像は、「庶民のヒーロー」のシンボルとして世に浸透した。

この劇作は、少なくとも3人の作曲家がオペラ化している。一つは、チェコ系ドイツ人ゲオルク・ベンダ(独語:1776、ライプツィヒ)、続いてはイタリア人のジョヴァンニ・パイジェッロ(伊語:1782、サンクトペテルブルク)、そしてもう一つが同じくイタリア人のジョアキーノ・ロッシーニ(1792-1868)の作になる(伊語:1816、ローマ)。ロッシーニは、先輩パイジェッロに肩入れする人々に配慮して、本作の世界初演(1816年2月20日)の際は題名を《アルマヴィーヴァ Almaziva》に変え、先輩の没後に《セビーリヤの理髪師》に戻している。

本作は、オペラ・ブッファ(イタリア語の喜劇オペラ)の最大ヒット作となり、ロッシーニがベートーヴェンと対面した折にも、楽聖は真っ先に本作を賞賛した(拙訳『ワーグナーとロッシーニ』より)。本日は、若き名歌手たちと俊英ピアニストの熱演で、その名場面を存分にお楽しみ頂こう。

まずは第1幕から理髪師登場のアリア【楽譜上はCavatina】〈私は街の何でも屋〉を。フィガロが猛烈にまくしたてる一曲だが、快活な曲調と言葉数の多さ(いわゆる「早口の歌」)もまた、庶民性の象徴である。次に伯爵のカンツォーネ【Canzone】〈私の名前を知りたいのなら〉。恋しい娘を窓辺に呼びよせるべく歌う、しっとりとしたセレナーデである。

続いては、フィガロと伯爵の二重唱【Duetto】〈金貨を見れば知恵が湧く〉を。お助けしますが報酬次第とちゃっかり語るフィガロと彼に頼りきる伯爵のやりとりが楽しく、後半で伯爵は貴族らしく流麗なメリスマ(歌詞の1音節に多くの音符をあてがう書式)を披露し、フィガロははきはきと歌い繋ぐことで、社会的な立場の違いも明らかになる。

ここで令嬢ロジーナのアリア【Cavatina】〈今の歌声は〉を。後見人に軟禁される彼女だが、恋も自由も諦めず、「屈服しないわ!」と意気軒昂に歌い上げる。ちなみに、メゾソプラノの響きの温かみをこよなく愛したロッシーニは、この曲でロジーナに低いG#(嬰ト音)に達する下降音型をたびたび歌わせ、意志の強さを音で肉付けしている。また、続くロジーナ

とフィガロの二重唱【Duetto】〈それじゃ、私なのね!〉では、恋の使者たる理髪師が令嬢に「窮状の打開策」で手紙を書けばと勧めるが、勧めた途端「もう書いたの!」と彼女が手紙を取り出すので、「まあ、手の早いことで」とフィガロも舌を巻く。ちなみに、この段階ではロジーナは伯爵の正体を知らず、「貧しい青年リンドーロ」と認識している。

ここで、第2幕から三重唱【Terzetto】〈思いがけないこの衝撃に〉を。伯爵と令嬢を駆け落ちさせるべく、フィガロが手はずを整えるが、恋人たちがメリスマ(もしくはコロラトゥーラ)で長々と喜び合うので、フィガロは焦り「見つかるよ!」と諫める。しかし、彼らはどく吹く風。ついにはフィガロもやけっぱちになり、難しいコロラトゥーラに加わるという「音のギャグ」が、本作最大の聴きどころになっている。

この後、後見人に見つかって万事休すとなるものの、伯爵は身分を明かし、アリア【Aria】〈もう逆らうのをやめよ〉で「卑劣な束縛を止めろ」と説き、ロジーナとの結婚を宣言。装飾音型が多発し上昇下降も目まぐるしい難曲中の難曲だけに、テノールが一気に歌い上げるさまに耳を^{そばだ}てて頂こう。

第2部 歌劇《ラ・チェネレントラ》より

いわゆる「シンデレラ物語(伊語:チェネレントラ)」は昔から何度もオペラ化されているが、ロッシーニの《ラ・チェネレントラ》(1817、ローマ)の特徴は、妖精やカボチャの馬車、ガラスの靴などの「超自然的要素」を排し、主人公のアンジェリーナ(チェネレントラ)が、身に着けた腕輪を外して青年に与え、「この腕輪を頼りに、私を探し出して下さい」と述べるといった現実的な展開を取る点にある。ロッシーニの人生哲学 ― 自分の道は自分で切り開け ― が脈打つ一作である。

本夕はこの名作から、8つの名場面が披露される。まずは導入部【Introduzione】中で主人公が口ずさむ歌〈むかしむかしある王様が〉。労働中の憂さ晴らしの一曲なので、童謡の如く短くも物悲しい旋律が彼女の境遇を象徴する。続いては、王子とチェネレントラの出会いの二重唱【Duetto】〈何か分からぬ甘美なものが〉。2人は共にひと目惚れするが、王子は身分を明かさずチェネレントラに語り掛け、彼女も控え目にそれに応じるが、恋する気持ちは互いに隠せない。ここでは、2人のそうした「おずおずとしたなり」が保たれるので、極めて難しいメリスマが展開

岸 純信(オペラ研究家)

するシーンながらも、「密やかな、秘めやかな恋心」が慎ましやかに表現されている。

続いては第1幕フィナーレ【Finale Primo】内的一场〈静かに!声をひそめて!〉。チェネレントラの儘姉2人の様子を尋ねる王子に、従者ダンディーニは「高慢と気まぐれ、虚栄心から成る合金ですよ」と辛らつに回答するといったコミカルな二重唱である。

次に、第2幕前半のシェーナ(朗唱部)【scena(recitativo)】〈あの美しい面影は〉を。多忙を極めたロッシーニは、本作の一部の曲作りを協力者ルカ・アゴリーニに任せ、本作のレチタティーヴォ(朗唱)のほぼ全てもアゴリーニが音符を付けた。それゆえ、ここはロッシーニの音楽ではないが、ドラマの要となる一節。王子に扮した従者の前で、チェネレントラは「貴男の従者に惹かれます」と述べ、従者を装う王子は心の中で「彼女は身分や富に関係なく、僕を愛してくれている」と喜び、前述の通り、腕輪が預けられるという流れになっている。

続いて、王子のアリア【Aria】〈必ず彼女を見つけ出すと誓う〉を。快活なアレグロのテンポで歌い進め、「絶対に見つけてやる!」という決意の証として、ハイC音を何度も歌い上げるが、中間部では彼の優しさが柔和な旋律美で描かれ、終盤では恋の勝利を確信する心が三拍子でリズムカルに表現されてゆく。

この次に、チェネレントラの歌〈むかしむかしある王様が〉がカンツォーネ【Canzone】と題されて再登場。家に戻った彼女が下女姿に戻ったさまが改めて表現される。その後、場面転換の一曲〈テンポラーレ ～嵐～〉【Temporale】が本日はピアノ独奏で披露される。心急ぐ王子と従者が駆けつけるさまを暗喩する名曲である。

最後に、〈チェネレントラのシェーナ〉【Scena Cenerentola】と銘打たれた幕切れのアリア〈哀しみの涙から生まれて〉を。王子と再会したヒロインは、自分に冷たくした者たちを赦すという寛大な心のもと、このアリアで愛の勝利を宣言し、オペラを締め括る。なお、本曲の後半は、《セビーリヤの理髪師》の王子の大アリアを女声用に細かく書き替えたもの。19世紀前半の作曲家たちは、同じメロディを違うオペラに転用することがたびたびあり、シチュエーションが異なっても、「音楽の中庸性」がドラマを成立させてゆく。本曲では、キャラクターの想い ― この場合は「真摯さ」 ― が、五線譜下の低いG#(嬰ト音)までなだれ込む「音の勢い」で露わになる点をお聴き逃しなく。